昭和42年11月20日　発行

黄金海峡

著者　邦光史郎

発行者　矢貴東司

印刷者　北山　茂

¥ 270.
≪検印省略≫

発行所　株式会社　桃源社

東京都中央区日本橋蠣殻町1－12
電話（666）4001～2番
振替東京64351番

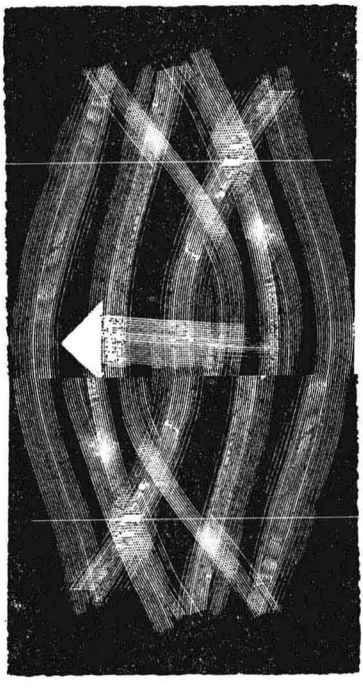
落丁・乱丁の節はお取替え致します

1967 ©

用紙特漉　北越製紙・市川工場

黄金海峡

邦光史郎



<ポピュラー・ブックス>

装幀 司修

挿絵 横塚繁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

目次

第一章　走れアダム……九
第二章　深海魚族……五八
第三章　傭われ騎士……一一四
第四章　名護の七曲り……一五九
第五章　黄金伝説……二〇五

黄金海峡

第一章　走れアダム

一

大阪の川口といえば、かつては安治川の河口であり港であった。出船千艘入船千艘が港を埋めた江戸時代の賑わいはともかく、明治大正の頃には中国人の居留地として知られ、いわゆる当時の南京街であった。繊維の街大阪に中国大陸からはるばる綿花を積んで船が入り、その綿といっしょに南京虫も運ばれてきた川口の居留地なのである。

けれど、世界市場にメイドイン・ジャパンの綿布を送り出した時代は戦争と共に去り、いまはナイロンをはじめとする合成繊維に押されて、綿成金の夢は過去のものとなってしまった。

大阪駅前一帯に拡がるいわゆるキタの繁華街を南へすり抜けて、ダブル並木の御堂筋を十二、三分ばかり歩いてくると、水量のゆたかな川にぶつかる。

これが堂島川であって、そこからさらにもう数十メートル南へ行くと、第二の川が河岸にあふれんばかりの水嵩を見せている。これが土佐堀川なのである。

そしてこの二つの川に挟まれた中州、といっても、実際に歩いてみると中州という感じはないがこのたて長い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

紡錘形の中州が、すなわち中の島であって、ここには地上十三階の新朝日ビルをはじめ、大阪市役所、日本銀行大阪支店、朝日新聞社、関電ビル、大阪大学だのという高層ビルがびっしりと隙間なく建ち並んでいて、この中の島を抱き込んだ土佐堀、堂島二つの河川は、大阪大学のすこし西方で一つに合している。

そこからは、川の名前も安治川と変って、やがて大阪湾へと流れ出て行くのであるが。この合流点の南側一帯を川口町と呼び、現在でも日本郵船をはじめとする船会社や倉庫が多く、いかにも海の近いことを思わせて、吹く風もなんとなく潮の香を含んでいるようだ。

端から端まで橋だらけだの、江戸八百八町、大阪八百八橋だのと、大阪には橋が多く、かつては水の都大阪と謳われたものなのである。

大阪駅前からとことこと走ってきたバスは、この川口町の手前で大きなアーチ型の橋をわたる。

バスの窓から眺めても分るとおり、この橋を渡ると、いかにも行く手の川口町はひっそりとうらさびれている。

街全体が灰色にくすんで、空の色さえこのあたりは、いまにも泣き出しそうに薄曇っているのだ。

笠原竜治は、そんな空の色をちらりと眺めて、やれやれと首をすくめた。

あのいかにもせかせかと活気にあふれていた北大阪から帰ってきたせいか、一層、この川口町の沈滞ぶりが鬱陶しく感じられてならないのだ。

こんな町の空気を五年も吸っていれば、水底に沈んだ船のように錆ついてくるのも無理はない。

いくら仕事が暇で気楽だとはいえ、これでは俺もそのうちに、すっかり水垢がついて身動き出来なくなってしまうだろう。

良い加減いまの会社に見切りをつけて、次の職場を探さなくてはならない。

Luigi

今夜あたり早速、退職願いを書いておいた方がよいかも知れんぞ。
そう考えながら川口町でバスを下りて、すこし南へ行くと、白っぽい新築ビルに挾まれたコンクリート壁二階建の堀川サルベージKKの前へ出た。
うっかり考えごとでもしていようものなら、たちまち通り越してしまう程小さな建物なのである。
看板の文字も半ば剝げ落ちて、堀川サル会社としか読み取れない。
沈んだ船を引揚げるよりも、いっそこっちがサルベージしてほしいほど業績の上がらない会社であった。
雨風に洗われてすっかりペンキが薄れ、木目の浮き出している重いガラス扉を押すと、人並みに蛍光灯を吊しても、まだ薄暗い事務所が現われてきた。
かつてはこの事務所にも数十人の社員たちが働いていたのであるが、いまは、その名残りとも言うべき机がならんでいるばかりで、人影は至ってすくない。
がらんとしたオフィスの内部で、事務をとっているのは、来客があった時お茶を淹れてくれる女事務員の足利美登利を除くと、すべて長のつくお偉ら方ばかりであった。
海事部長春川晴彦、営業部長山内弘、どちらも潮灼けした赭顔に鋭い眼つきの中年男だが、いかんせん、部下のいない連隊長では、とんと威厳が伴わない。
そういう笠原も、まだ三十前だというのに、海事係長の肩書をもらっていたが、ライバルはおろか上司も同僚もいない会社では、いくら昇進したところで一向に張合いがなかった。
しかし、昼なお薄暗い洞窟めいたオフィスに、机ばかりが整然とならんでいる光景は、いかにも現代の怪奇めいて不気味なのである。
カウンターの片隅に設けられたスイング・ドアをきしませて板張りの床を踏むと、ぽこぽこと乾いた音がひび

いた。
「部長、ただ今帰りました」
声をかけると、十席ばかりならんだ空机に向って席を占めている春川部長が、じろりと顔を上げて黒眼をよせた。
二十貫をこえる巨体の持主で、そのくせ至って童顔愛すべき人物だったが、惜しいことにいささか双眸がヤブにらみ、つまり斜眼なのである。
だが、そのロンドン・パリにも効用があって、いかにも茫乎(ぼうこ)たる大人物に見えないこともない。
「やあ、御苦労はん。どないやった」
体の割合にすると声が細くて背高く、人一倍気の小さい春川部長は、いつ笠原が辞表を叩きつけるかと、そればかりを恐れている風があった。
そのために、こちらが気詰りなほど気を使って、まことに愛想がよい。
たとえ擬態であるにせよ、こうまで気を使われると、やはり冷酷なことも言い出せず、そのためついいつまでもこの会社から足が抜けなくて困っていた笠原なのだ。
「ええ、それがね部長……」
近よると、しきりに部長は服の袖口を気にしている。
どうやら袖口がすり切れて、糸がほつれているらしいのだ。
思わず笠原は眼をそむけて、ただひとりの女事務員足利美登利の浅黒い横顔に視線を遊ばせた。
彼女も逃げ損ったひとりだが、営業部長の遠縁だというからやむを得まい。
しかし、結構いそいそとこの沈みかかった会社へ通ってくるのには、いささか訳がありそうだ。

二十九歳になってもまだ処女だという噂を聞いているが、多分そうかもしれない。
彼女自身が宝の持ち腐れを持て余していようといまいと、笠原には関係のないことだったが、同じ独身者がた った二人だけ、この人気ない事務所で毎日顔をつき合わせていることは、どう考えても精神衛生上好ましいことではなかった。
事実、足利美登利は、時折、一体いつまで待ったら手を出してくれるのだといわんばかりに怨めし気な顔つきを示した。
そんな時、ふと彼女の脂じみた顔に吹き出したニキビに気づいて、笠原は、わっと叫んで逃げ出したい衝動に駆られたことがあった。
そのくせ、そこは男の賤しさで、うつむくと乳房の谷間の覗ける夏服の季節になると、なんとなくかまってみたくなるのだから、男と女との間だけは、なかなか理窟では割り切れないものなのである。
「そうか、するとやっぱりあかんかったんやな」
自分で自分の言葉にうなずいている部長の声にふと笠原はビジネスの世界につれ戻された。
「ええ、残念ながら、十万円の差で、日東さんに落ちてしまいました」
「十万のちがいか……。やむを得んなあ。しかし笠原君、屑鉄の値段がトン当り一万五千円にも落ちよったら、こらもう下手に仕事せんと、眠っとる方が勝やで」
「かもしれませんな。しかし部長、たとえ小口でも、この辺で一つ仕事をしておかないと、つなぎ資金が足りなくなるんじゃありませんか」
たとえ賞与はほんのお志し、昇給ストップの手当なしとはいえ、まだ技術関係を含めて十人近い社員が残っている以上、無収入ですます訳には行かないのだ。

「そやがな、そいつがあるさかい、ここで一番と思うたんやが、十万の差で蹴られたとあってはしようがない、なあ笠原君、こうなったら、また土地でも売ってこの夏まで凌がんと仕様がないやろな」

昨年一年は、築港の作業用地を売りとばして蛸配をつづけ、今年は残った技術部関係の土地を手放し、いよいよ来年あたりはこの本社を取り潰して人手に渡さなくてはならない情勢に立ち至りそうだった。

「といって部長、当分屑鉄の値上がりがきそうな気配はありませんからな」

「ほんまやで、こうなったら、朝鮮戦争から神武景気の頃が懐しいわい。何んせ物価が現在の半値で、屑鉄の値段の方はトン当り四万五千円と、五倍近かったんやさかい夢のようやった」

その時代は、海の底に宝の山を抱き込んでいたようなもので、戦時中に沈んだ船はむろんのこと、日清・日露戦争で沈んだ船でも引き揚げようかという屑鉄ブームだったのである。

「だがな笠原君、山があれば必ず谷がある。世の中ちゅうもんはそういうもんやで、夜が深くなるほど夜明けが近いと、ええこと言うとる偉い人がいてはる。もうちょっとの辛抱や、ここで投げ出したら、いままでの苦労が水の泡や。そう思うて、実はわしも耐えがたき所を辛抱しとるんやさかいな」

口先一つで船主や海上保険会社のあいだを渡り歩いて仕事を取ってきた男だけあって、この春川部長の舌先に乗せられはじめるととめどがなかった。

「ええ、じゃ部長、明後日ぐらいにこの前の濃霧で沈んだ例の貨物船の入札があるそうですから、そいつの研究をやっときますよ。三月に一ぺんぐらいでも仕事を取ってこんことには、事務屋はともかく技術屋が逃げ出しますからな」

そう言って部長の席からカウンターに近い席に戻ってきた時だった。

いつ表扉が開いたのか、珍しい女客がカウンターの向うに佇んでいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb